

1

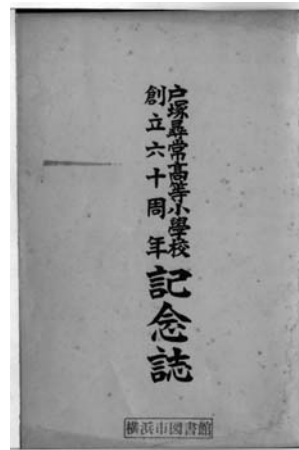
戸塚尋常高等小学校／編

戸塚尋常高等小学校創立六十周年記念誌

戸塚尋常高等小学校

昭和8(1933)年6月1日

横浜市中央図書館



2

戸塚実科高等女学校／編

戸塚実科高等女学校創立五周年記念誌

戸塚実科高等女学校

昭和8(1933)年6月1日

横浜市中央図書館



●「戸塚の記念誌」凡例

①講演会「記念碑が語る昭和の戸塚」(平成21年11月7日)の参考資料として、「戸塚の記念誌」一覧を作成した。

②「戸塚の記念誌」は、昭和期以降に戸塚をテーマに発行された記念誌の一覧である。

③配列は、出版年月日順とした。

④この一覧は網羅的なものではなく、ほかにも類似の記念誌が出版されている。

⑤図版の左に目録情報として、著編者名・書名・発行者名・出版年月日・所蔵機関を記載した。所蔵機関が複数の場合は、横浜市戸塚図書館を優先した。

⑥一覧は、久野淳一が作成した。

はしがき

本校が明治六年六月始めて開校せられてより茲に六十周年を迎へ、校運益々隆々たるものあるは、誠に喜ばしい事であります。

今や非常時局に際会し、一層国民教育の方面に、更に更に深き注意を向けらるゝ事を希ひ、我々は又過ごし来た道程を回顧して反省し、これから先き如何に歩むべきかを考へるといふのは、最も時宜に適したる事であります。記念式はかゝる重要な機会を作る、非常に意義深き催しであつて、決して気まぐれのお祭さはぎではありません。本校が町当局や卒業生及び学校に同情ある方々の後援の下に、厳肅なる記念式典を挙ぐるの精神は、実にこゝにあるのであります。

又此機会に、創立六十周年記念誌を編み、学校関係の方の御覧を願ふ事になりました。併しながら古きは記録の徴すべきものなく、古老に聞くの暇もなく、加ふるに経費限りありて、意を尽す能はざりしは、甚だ遺憾で御座いますが、これによりて聊かなりとも当時を追懐するの資料ともなり、現状に照して今日の喜びを共にして頂けましたならば、誠に幸とする所であります。

私は此の小冊子を、物故された当校の関係者及び児童の霊前に捧げてこれを慰め、なほ六十年の長い間に、当校進展の為に寄与された多くの方々に対し、心からなる敬意を表し、併せて今後一層の御後援をお願いする次第であります。

昭和八年六月一日創立六十周年記念日に当りて  
戸塚尋常高等小学校長 森久保敬次

はしがき

昭和三年三月当町御大典記念事業として創立せられました当校は、本年三月正に五周年を迎へたのであります。卒業生を出すこと三回、現在生徒数百五十七、成績亦大いに見るべく、校運年を逐ふて益々隆々たるものあるは誠に喜ばしい事で、創立当時を追懐して感慨無量なるものがあります。これ偏に各方面の御後援に依るもので、常々感激措く能はざる所であります。

今回戸塚小学校創立六十周年と共に、当校創立五周年の記念式を挙ぐるに当り、諸材料を集めて記念誌と題し、当校関係者の座右に呈して、過去五ケ年の報告に代へたいと存じます。

茲に洋々たる当校の前途を祝福し、此五ケ年間色々御同情下さいました方々に対し、深甚なる感謝の意を表すると共に、将来の御援助をお願いする次第であります。

昭和八年六月一日創立五周年記念式に際して  
戸塚実科高等女学校長 森久保敬次

3

中嶋富之助／著

戸塚郷土誌

戸塚町郷土研究会

昭和9(1934)年8月20日

横浜市中心図書館



4

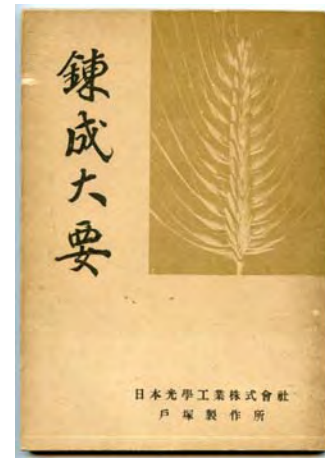
日本光学工業株式会社戸塚製作所／編

錬成大要

日本光学工業株式会社戸塚製作所

〔昭和18(1943)年〕

横浜市中心図書館



5

戸塚区役所調査課／編

戸塚区勢要覧 昭和23年版

横浜市戸塚区役所

昭和24(1949)年3月31日

横浜市中心図書館



序

俳壇の巨匠高濱虚子氏の詠句に

灰の如き記憶たゞあり年暮るゝ

走馬燈の如く流れ去る一年の回顧は蓋し斯の如きものであらう 我等の郷土も日に月に流れつゝある 江戸に十里小田原に十里の間隔をもつた驛路旅籠や商賈で殷賑を唄はれた東海道五十三次の泊り宿の俤も今は尋ぬるに由がない 僅かに其の一端を廣重の絵などにより思ひ出す外ないのである

今文化の力は自然の領域までも侵して柏尾川流域の改修蜒々二里に亘る桜の堤は年々何万と云ふ人出を見るようになった 五万余坪の競馬場九間幅の「コンクリー」道路 一日に一千台の自動車の来往 何と云ふ変りようであらう 澎湃として流るゝ文化の潮

手甲脚絆の膝栗毛 駕籠に揺られての道中何れもあこがれの情象ではあるが今は却て砥の如き舗装道を自動車で馳駆するの快を歎美せざるを得なくなったのである 要するに是が時代の現はれである我等は此の趨勢に即して大戸塚の出現に努めなければならぬが一面此の古い古い過去の古壺を此の儘忘れ去ることは出来ない 失はれ行く一草一木にも云ひ知れぬ執着があり憧憬があるのである 茲に郷土に対する愛着は有志の輩に依り散逸の遺緒を蒐め其の変遷の跡を録すべく此の編纂が企てられたのである

着手以後年を閲すること約六ヶ年漸く稿成り上梓することになった 随分陣痛が長かつたがうぶ声があがつた我等は祝福歎喜せざるを得ないのである

本書編纂に就て

一、昭和五年町より決議を以て多額の補助金の交付を受けた事を茲に明記し感謝の意を表するものである

二、編纂に関して神奈川県史蹟調査委員横浜市史編纂員中山每吉氏の助力を得たことは仕合せであつた 其の間実地踏査に資料選択に到底他人の想像しがたい御苦勞をかけたのである 更に編纂委員諸氏の努力と俱に貴重なる資料を提供せられたる諸賢且つ又本事業を翼賛せられ多額の資金を恵与せられたる各位に対し心から深甚の謝意を表するのである

昭和九年六月

内田隆三

戸塚製作所に於ける精神運動沿革の概要

総務課長 濱島昇

当製作所に於ては、夙に現在に於ける技術水準を打開し、今後一段の飛躍をなさしめんがためには、従来ともすれば其の技術的構成に於て乃至は管理上の組織運営に於て、所謂外国式機械觀に墮せんとするの傾きあるを止揚し、之に加ふるに新らしき日本的性格を以てするの喫緊事なることを痛感した。而て之に到らんがための方法として、先づ技術の前に精神のあることを、機械的整備の前に人格的陶冶のあるべきことを強調し、以て澎湃たる精神運動を通じて、極力全従業員の自覚を促さんとしたのである。

特に前記当製作所設立当時に於けるが如く、多数の年少未経験工員を短期養成し、以て之をして光学兵器の如き高級精緻なる作業に於ける相当の技術的水準に達せしめんがためには、どうしてもかゝる運動を以つて之れが訓練の基礎たらしむる必要があつたのである。

茲に於てか工場即学校、職場即道場なることを高唱し努めて其の人格的向上に対する意欲を喚起し、且つ作業及び生活に対する正しき見方の把握を求めたのであつた。

而してその後産業報国会精神の昂揚、惹いては産業報国会結成の要が叫ばれるに到るや当製作所に於ては去る昭和十四年八月を以て右の精神運動に加ふるに、従来親愛会の名の下に行はれ来りし体育、慰樂、厚生等に関する各種事業をその傘下に収め、茲に日本光学戸塚産業報国会を組織し、爾来愈々其の内容の充実、産業精神の発揚に努力を続け以て今日に及んでゐるのである。

さて(以下略)

はしがき

当区は昭和十四年戸塚区誕生以来一度も区勢の概要を刊行した事がない。尤も戦争中は尚更であつたが終戦四年を迎へて其の間資料の散逸、新時代への移行に伴ふ事務の混乱等の事情で困難は感じたが地方自治制度の確立により区政の全貌を概見する冊子を要望する声が大きくなつたのでこれが便に供するため昭和二十三年版を編輯、発行することとした。

而してその編輯に當つては区政の一般を知るに便せんがため区役所所管以外の事項も必要と認めたものは努めて蒐集掲載した 本書は主として二十三年度の統計事実に重点を求めたが調査の関係上異なる者は各項の傍らその期日を略記した。最後に本書をよき道標としたいと考え史実伝記等を集録せんとしたが紙数の都合で其の意を得なかつたが本書の統計事実で当区の変遷消長を知らうと思ふ者の参考となり且つ生々発展の一助としていただければ幸と思つてゐる。

6

日立製作所戸塚工場総務部庶務課／編

戸塚十五年

日立製作所戸塚工場総務部庶務課

昭和27(1952)年8月20日

神奈川県立図書館



#### ——巻頭言——

大正7年、東亜電機株式会社創立を振り出しに、昭和12年この地に工場を移転創業以来、こゝに15周年を迎えるに至つた。この間幾多の試練に会つたが、幸いにしてこれを克服することができた。

斯くて創業以来一貫して通信機製造工場として今日この発展を見たことは、いささかなりとも日本通信機工業界進運に寄与することができたのであつて誠に同慶に堪えない。

思うに、東亜電機株式会社が、その業を創め、未踏の地を開拓することは容易なことではなく、又決して一人の力を以てすることはもとより不可能である。東亜電機がその変遷の過程において、幾多の困難に直面するも常に至誠協力奉仕を以て貴しと為し、又通信機工業の公共性をよく理解され、困難な茨の道を常に温き抱擁を以て鞭撻指導された。この結果永年の赤字経営は転じて黒字経営となり、今日斯く隆昌を見るに至つたことは誠に感激の念を新にするものである。

併し乍ら、斯く発展を喜ぶと共に常に脳裡を去来するものは鮎川義介氏の恩顧と村上正輔氏の薫陶であり、近くは日立製作所社長故小平浪平氏を初めとする首脳部の深き理解と指導鞭撻の賜である。われらは永久にこれを忘れてはならない。

また、顧客各位の顧眷に対しても、こゝに新めて深甚なる感謝を捧げる次第である。

今や、講和条約は発効となり、愈々わが国産業の再建振興に前進すべき秋である。われらは今後一層技術の練磨と能率の向上に専念し、和衷協力してあらゆる苦難を克服し、日立の通信機をして日本の、そして世界の通信機たらしむべく更に努力しなければならない。

7

石渡惣平(号・素行)／著

上矢部郷土史

石渡龍之助

[昭和31(1956)年]

横浜市中心図書館



#### 自序

夫レ国ニ国史ヲ備フル如ク郷土亦々郷土史無カルベカラズ。然ルニ元亀天正ノ頃迄ハ国内騒乱相次キ郷民安カラズ。難ヲ避ケテハ転々トシテ他国ニ移リ神社仏閣ハ頽廢ニ委シ或ハ民家ト共ニ兵燹ニ罹リ記録從ツテ泯ビ古昔ノ史蹟ヲ尋ヌルモノ唯口碑ニ伝フルモノアルニ過ギザルニ至レリ 今ニシテ是ヲ糺シスレバ録セズンバ幾何モ無ク湮滅シテ口碑モ全ク消ユルニ至ランカ 余深く之ヲ憂テ止ズ。

余少ヨリ旧事ヲ問コトヲ好ミテ父祖ヨリ伝ヘ聞キタル事甚ダ多シ、而シテ余ガ祖父ハ享和三年ニ生レ八拾八歳ノ高齢ニ達シ明治廿三年五月臨終ノ期ニ至ルマデモ意識強健能ク古事ヲ記憶シテ語レルナリ。加之其先代ニ於ルモ世々長寿者多ク初祖ノ如キハ百四歳ノ避齡ヲ保チタル者モ在リテ代々古キ伝説ヲ遺シタル事多シ。就中享保年間ヨリ以降二百年一亘リテ公租ノ領収証ヲ保存セル等ノ一例モアリテ村内ニ於ケル旧記事蹟ヲ多ク伝ヘタルヲ誇ルモ毫モ怪マザル所ナリ。今ヤ斯ノ如ク遺シタル史実口碑等ヲ綴リテ後世ニ伝ヘ愛郷者ノ坐右ノ友ト為サント欲スル者ナリ

抑モ父母ニ孝ナル者ハ克ク父母ノ業ヲ紹グモノハ善ク父母ノ郷土ヲ愛ス。善ク其郷土ヲ愛スルモノハ尚善ク祖先父母ガ郷土ニ尽シタル事蹟ヲ詳カニセント欲スルハ孝子ノ至情ニシテ祖先ガ郷土ニ尽シタル功績ヲ顕カニシテ代代ノ遺業ヲ匡紹シテ其面目ヲ耻カシメズ名声ヲ揚グルモノハ孝ノ終ヲ全フセルモト謂ツ可シ。斯ク觀ジテ深く想フ時ハ郷土史編輯ノ事タル必ズシモ無用ノ閑事業ニ非ラサル可シ。

方今思想左傾ノ嘆声頻々トシテ聞ヘ田圃ノ人ハ祖先ノ遺蹟ヲ捨テテ都人ノ華美ヲ慕ヒ郷閭ヲ脱スルモノ滔々トシテ多キヲ増ス。

余不敏ナルモ深く是ヲ歎ジテ自ヲ文盲ヲ顧ミズ茲ニ斯ノ編ヲ成シテ愛郷觀念ノ鼓吹ニ資セント云爾

昭和參年拾月新嘗祭之日 石渡素行識

8

戸塚区役所戸籍統計課／編

戸塚展望

横浜市戸塚区役所

昭和34(1959)年10月1日

横浜市中心図書館



#### 『戸塚展望』発刊のことば

昭和14年4月、当時東海道の1駅だった戸塚町が、周辺の7ヶ村とともに横浜市に合併されて、「戸塚区」として誕生してから、早くも20星霜が流れました。古い歴史をもつ戸塚の当時を知る人々にとつて飛躍的な発展途上にある現在の姿は誠に感慨深いものがあると存じます。しかしながら、このめざましい発展は唯に時の流れによつたものではなく、区民1人1人の発展に対する努力の結集でありまして、20周年を迎えた現在、区政担当者として心からの敬意と感謝を捧げる次第であります。今後においても、なお一段の御協力を願うわけですが、それには現在の姿をよく知つて頂くことも必要と存じまして、このたび「目でみる区勢要覧」とも言うべき本書を企画したわけでありまして、もとより区の全ぼうを収録できず、意に満たないものとなりましたが、これによって当区発展のため、又その構想を練る上に多少なりとも資することができれば幸と存じます。

こゝにわれらの戸塚区が益々発展することを皆様と共に祈念して、発刊の言葉とする次第であります。

昭和34年10月1日

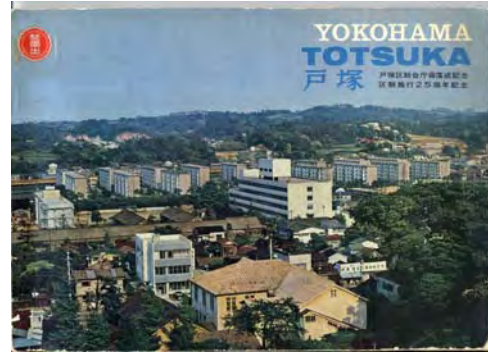
戸塚区長 坂瀬政雄

YOKOHAMA TOTSUKA 戸塚  
戸塚区総合庁舎落成記念 区制施行25周年記念

横浜市戸塚区役所

昭和40(1965)年7月15日

横浜市戸塚図書館



発刊のことば

戸塚は古く鎌倉時代より開け、徳川時代には東海道の要宿として由緒ある歴史を重ねて、往時より世人に親しまれてきました。

昭和14年4月、戸塚区が発足した当時の人口は36,000余でありましたが、本市産業経済の発展に伴い、当区の工業生産の振興は、住宅地の開発と相俟って急テンポに伸張し、今日では人口194,000余を数えるに至り、発足当時より6倍近い飛躍を示し、今後なお一層の急進が予想されます。

これも偏に区民並びに関係者各位の長年に亘る努力の成果でありまして、心から敬意を表するとともに、今後一層の御協力を御願いたします。

こゝに区制施行25年経過と、区総合庁舎落成を記念し、当区の全貌を収録する意図で本書「戸塚」を発刊いたしました。意満たない点が多いこと存じますが、常々区勢に心を寄せられる皆様に、少しでも御参考となりますれば望外の喜びであります。

昭和40年7月

戸塚区長 藤巻利吉

戸塚区郷土誌編纂委員会／編

戸塚区郷土誌

戸塚区観光協会

昭和43(1968)年10月6日

横浜市戸塚図書館



発刊にあたって

戸塚区観光協会長 小野数雄

昭和二十八年に郷土を愛する方々の努力により、戸塚区観光協会が設立され(初代会長故小串清一氏)以来、柏尾川堤の桜の植樹と保護育成・東海道松並木の保護及び史蹟の保存と復旧に努めております。

また毎年四月には、既に恒例となりました桜まつりを催し、柏尾川桜堤を中心に各種行事が盛大に行われているわけでありまして。

しかしながら最近の戸塚区は産業経済の発展に伴いまして、目覚ましい伸張をみており、また住宅地の急テンポな開発と相俟って、大きく変貌をきたしております。

この喜ぶべき発展の犠牲として鎌倉時代よりの文化史蹟が次々に失なわれ、また新しい時代性により、私たちの祖先が歩んだ歴史も、郷土を愛する心も次第に忘却されんとしておりますことも否めない事実であります。

戸塚区観光協会では、このことを憂い、永く郷土の史実を伝えるとともに郷土を愛する心を深めて頂くため、昭和三十八年に郷土誌編さん委員会を設置のうゑ鋭意資料の収集、調査を重ねた結果ようやく編集を終り、ときあたかも明治百年の記念すべき年に発行できましたことを関係者一同深く喜びに堪えないところであります。

また、その間にあつて、委員各位のお骨折りと区民の方々のご協力を心から感謝申し上げます次第でご座います。なお特に大橋俊雄、古川甫両先生並びに長坂万二氏(前観光協会長)には特段のご尽力を賜り厚くお礼申し上げます。

どうか皆様におかれましても、この郷土誌をいつまでも机下に置いて頂きまして、戸塚区に住む誇りと郷土を愛する心を次代にお伝え頂くことをお願い申し上げます。発刊のご挨拶といたします。

戸塚 区制施行30周年記念

横浜市戸塚区役所

昭和44(1969)年4月25日

横浜市戸塚図書館



発刊によせて

戸塚区長 木下治男

昭和14年4月1日、戸塚区が誕生してから、今年で、30周年を迎えることになりました。

当時の戸塚区の姿から、誰が今日の繁栄を予測した人があったでしょうか。この目ざましい発展は、先人の方々の不断の努力と区民の皆様の御尽力の賜であり、まことに感謝にたえない次第であります。

しかし乍ら、この輝かしい発展の影に、なお、解決を急がねばならない数多くの問題をかかえていることも事実であります。道路、下水等生活環境の整備、交通、教育、治水、接收問題等であります。

私達は、今、思いを新たに、更に努力を重ね、区民の皆様と手をたずさえて、難問の解決につとめ、調和のとれた都市づくりに邁進いたしたいと存じますので、区政に対するなお一層の御協力と御援助をお願いいたしたいと存じます。

この意義ある年を記念いたしまして、ここに戸塚区の区勢を紹介し、大方の御参考に供するため記念誌を発行することといたしました。

本冊子が区政に深い御理解と御関心を持たれる区民の皆様の参考になるならば、望外の喜びであります。ここに戸塚区の将来の躍進を祈って、発刊のことばといたします。

昭和44年4月

12

日立製作所戸塚工場／編

日立製作所戸塚工場史 1

日立製作所戸塚工場

昭和45(1970)年8月15日

横浜中央図書館



序

当工場は、大正7年に創立された東亜電機株式会社を前身とし、戸畑鋳物株式会社、国産工業株式会社を経て、昭和12年5月日立製作所との合併により日立製作所戸塚工場として発足いたしました。

昭和42年5月には、戸塚工場としてこの地であたかも30周年を迎え、その記念事業のひとつとして、戸塚工場史の刊行が企図され、泉頭豪信氏を委嘱して編纂事業が進められてまいりましたが、このほど漸く上梓の運びとなりました。

かえりみますと、東亜電機で電話機の製作を開始して以来幾多の困難に遭遇しながらもこれを克服し、今日の日立通信機を築き上げることができましたのは、先輩諸氏並びに従業員各位のご尽力の賜物であり、心から感謝の意を捧げるものであります。

今後、私どもは、急激な技術革新の進展と国際化時代にあって先輩諸氏の残された伝統の成果を受け継ぎ、さらに新しい歴史を築き、きたるべき時代の礎となる所存であります。

本史では戸塚工場以前の過去を含む約50年間の各年代における先輩の歩みと、広く寄せられました御支援の大事が集約されてあります。

現段階はいかにして築かれたか—企業の経営はいかに推進され、新技術の開発はいかに達成せられ、技術の伝統はいかなる苦心によって育てられ、かつ、伝承されてきたか—現在ここにつどいはげみ、将来ここに来りつどう人達によって、これらの教訓を学びとってほしいのが工場史刊行のひとつの目的であります。

ここにこの機会にあたり、事業の進展に際し広く寄せられました各方面の御支援を謝し、あわせて先輩の労苦をねぎらい功績をたたえる次第であります。

昭和45年3月

日立製作所戸塚工場

工場長 山内康平

13

坂本光雄／写真・大橋俊雄／文・益田次郎／編

戸塚今昔

戸塚通商有限会社

昭和50(1975)年11月15日

横浜市戸塚図書館



この写真集は芸術性豊かな写真集ではありません。写真本来の使命である記録性を生かし、今まで手もとにあったものを整理し、古きものと新しいものとを比較しながら編集したものです。ここに今昔と名付けた意味があるのです。

郷土戸塚の姿も日一日と新しさを加えてきています。古い姿を記憶する人も、次第に少なくなってきたのが現状です。昭和五十年を期して、そうしたものをまとめておきたいと、つね日ごろ考えていましたとき、アルバムをつくる話があり、こうした写真集をつくることができました。写真集をつくるにあたっては、貴重な資料をお持ちの方々の協力を得ました。厚くお礼申し上げます。

ご覧になって懐かしく当時を思い出して下さる方もあれば、知らない戸塚を新しいふるさととして興味をもって見て下さる方もあろうかと思えます。ふるさと戸塚のアルバムとして、昭和五十年のよき思い出として見ていただければ幸いです。

坂本光雄

戸塚の移りかわりは目まぐるしい。今や三十四万になんなんとする人たちが、戸塚を新しいふるさととするために、移り住もうとしている。丹沢・箱根の連山をしたがえて、くつきりとうかぶ富士の霊峰を遠くにながめ、静かな風光美を愛でている今でさえ、どこかで建設の槌音はひびいている。建設は自然の破壊である反面、戸塚の発展を物語っている。発展をねがう人がいるかと思うと、自然の破壊を悲しむ人もいる。発展を夢見ながら前を見てすすむか、過去を郷愁としてとらえるか、そこにはまた老若男女、ここに住む人と、曾って戸塚に生れ生活の場にした人、それぞれのおかれている環境に差はあるが、差があるだけにまた懐古趣味に徹する人たちもいる。過去をよき思い出とする人たちである。

昭和も五十年になった、ここらあたりで昔の写真をあつめ、現在と比較してみたい。こんな願いをこめて「戸塚今昔」の構想を考えてみた。幸い写真は坂本光雄氏が戦前から撮っていたものを、今まで精進しつづけてきた一つのくぎりとしてまとめておきたいという願いと軌を一にしたことが、幸いとなって、手もとにあるすべてを提供して下さった。文は地方史研究家の大橋俊雄氏が担当し、解説と戸塚の歴史を書いてくださった。古い写真があれば、何なりと提供してほしい。そして第二・第三の「戸塚今昔」をつくってみたいと思っています。

益田次郎

14

海軍軍医学校戸塚一期会追悼録  
刊行委員会／編海ゆかば 海軍軍医学校戸塚一期  
戦没者追悼録海軍軍医学校戸塚一期会追悼録  
刊行委員会

昭和51(1976)年5月27日

横浜市史資料室



刊行にあたって

海軍軍医学校を巣立って、早くも三〇年の歳月が過ぎ去りました。

この間、われら同期生の脳裡に強く灼きつけられてきたものは、祖国永遠の安泰と発展を信じて悠久の大義に殉じた戦友への深い哀しみと哀惜の念でありました。

戸塚原頭の海軍軍医学校に入校して以来、海軍生活で経験したものは、生死を超えた一事でありました。それはともに過ごした者でなければ語り得ないものであります。

うつし世に生きながらえるわれらも、幽冥界を異にする護国の神も、この一事においては一心同体であります。このことを実証することが、われらに課せられた終生の責務であり、神々に応える道であると信じます。

幸い同期生諸兄、旧海軍関係の方々から、戦没同期生のありし日の姿を、それぞれお寄せいただきましたので、ここに編集してみました。

ご多忙にかかわらず玉稿を賜りました方々のお力添えに、心から感謝とお礼を申し上げます。

昭和五〇年九月三〇日

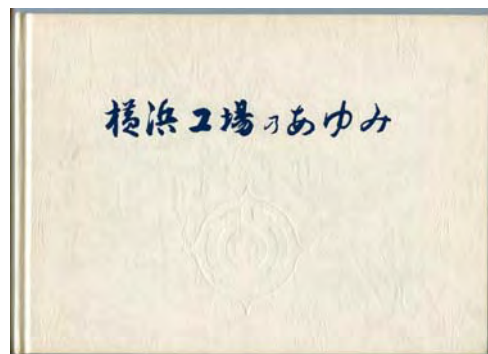
海軍軍医学校卒業三〇周年に際して

編集委員会

15

株式会社日立製作所横浜工場 総務部庶務課／編

横浜工場乃あゆみ



株式会社日立製作所横浜工場

昭和51(1976)年10月1日

個人蔵

発刊のごあいさつ

昭和34年2月、横浜工場が、この地に創業を開始して以来、10有余年が経過し、この度、その発展の歩みを記録にとどめ、後世に引継ぐため、ここに小史を発刊することになりました。

顧みますと、当工場は、当初、テレビとラジオ、テープレコーダー、ステレオなどの音響機器を巾広く手がけて参りましたが、これら商品に対する旺盛な需要に応えるため、昭和42年、東海工場の独立とともに、ラジオ、テープレコーダー部門を移管し、つづいて、翌43年には、豊川工場の独立とともにステレオ部門も移管し、以後、当工場はテレビの専門工場として発展し、今日に至ったのであります。

しかし、この間、順風満帆の状態がつづいたわけではなく、相つぐ技術革新とはげしい企業競争にさらされ、一時たりとも、息の抜けない厳しい試練の連続でありました。そして、このような苦難の中で、常に、全従業員の叡知を結集し、「技術の日立」の名に恥じない「美しい画面、丈夫で長持するテレビ」の開発を目ざして苦勞をつづけてきた、諸先輩のたゆまざるご努力と、関係各位の絶大なるご支援、ご協力が、今日の横浜工場発展の原動力となっているわけであり

ます。今や、私達の手によって作られたテレビとその技術は世界約50ヶ国に輸出され、「世界の日立」の一翼を担っております。私達は今後、これら諸先輩の残してくれた伝統と、輝かしい実績の数々を踏まえ、いかなる苦難にも負けない強固な工場体質を備えた立派な工場として、更に成長するよう努力して参りたいと思ひます。

今後とも、関係各位の一層のご指導、ご協力をお願いし、発刊のご挨拶と致します。

昭和51年7月

工場長 小林信市

16

郷土戸塚区歴史の会／編

ガイドブック 戸塚の散歩みち



「みんなで探ろう郷土の歴史」実行委員会

昭和53(1978)年1月25日

横浜市戸塚図書館

古道——歴史の道

——序文にかえて——

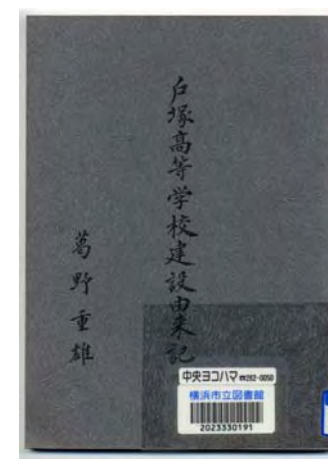
古道はその時代の政権所在地の方向にむかってひらかれるのが常であった。源頼朝が鎌倉幕府をひらいてから、戸塚区域の南部は鎌倉の一部ともいえる地域であったので、多くの鎌倉道が区域内を通るようになった。戦国時代に後北条氏が小田原に覇をとなえるようになると、のちの東海道のコースや区域の北部に接する中原道が発達した。やがて江戸に幕府がひらかれると、東海道が第一級の国道としてにぎわい、民生の向上とともに暮らしの道として、各村むらを結ぶ大山道などの地方道が各所に通じるようになった。政治ばかりでなく、経済や文化が、これらの道を伝わって民衆の暮らしを変えていったので、古道の沿道には各時代の歴史を知る手がかりが残されている。市域のうちでもとくに戸塚区域は古道の遺称(ママ)が豊富であり、その道すじに興味ある史話をさぐることができる。太古から現代にいたる民衆の暮らしの哀歓を秘めた古道に、歴史の道を見いだすことができよう。

郷土戸塚区歴史の会会長 内田四方蔵

17

葛野重雄／著

戸塚高等学校建設由来記



小野惇

昭和53(1978)年4月20日

横浜市中央図書館

序

今年は創立五十周年並に高等学校制度実施三十周年と聞くと矢張り感慨は深い。着任翌年の昭和二十三年に創立二十周年記念式典を挙げ、三十九年二月三十五周年並に図書館落成記念式典を行い、その三ヶ月後に退任したのであった。

戸塚と私との縁は全く偶然であった。戦後の教育改革を前にして諸般の準備を進め、非常な困難を侵して昭和二十二年度当初に新学制実施に漕ぎつけ、四月二十八日に新制中学校長辞令交付式をすませて、ほっとした五月中旬、神奈川県知事から「横浜市立戸塚高等女学校長事務取扱ヲ命ズ」という辞令を交付された。既に横浜市の教育行政に数年間携っていたのであるが、戸塚高等女学校に関する知識は皆無に近かった。取敢えず学校と連絡をとって五月十六日に着任した。

着任当日私の目にした学校の実情は、全く私の予想に反したもので唯々啞然とするのみであった。校歴既に十九年だというのに、どうしてこんな学校が存在したのだろうか、どうにも理解できない。ただ其所に学ぶ生徒の素直であどけない顔が、私の胸に焼きついて残った。新教育普及のための講習会等の本務があるので、週に二日か三日しか来られなかったが、その時は必ず戸塚地区の友人知人を訪ねて、当地区の教育意識や教育慣習について質した。その結果当地区の教育慣習は、東京横浜等の他地区の教育施設に依存し、地域社会教育施設の設置に無関心であることを知り、驚くと共に放置できない問題だと痛感した。あの素直な生徒の幸福のため、又当地区に於ける真の教育振興のため、この地域の教育土壌の開拓は、私に与えられた天命であると考えた。今まで教育を学として学び且つ教室で教育を講義していた私は、今こそ一転して教育の実践に挺身すべきであると心に誓った。

偶明年は新学制実施第二段階の新制高等学校制度実施の年である。この戸塚に少なくとも標準的の高等学校建設を私の使命としようと思ひ、当局の了解を得て二十二年九月より当校に腰を据えた。

爾来校舎改造の促進備品整備等の当面の問題を処理しながら、戸塚高等学校建設構想を練って行った。公立学校は恐らく地域社会学校でなければならないとの原則に立つ時、戸塚地区の将来像を考えなければならない。構想を練ると共に努力したことは、父母を含めた住民の教育意識の改革であった。そのため戸塚地区内の多くの人々、特に指導的立場の方々とは機会を見ては相語り同憂の士となって頂いた。本校建設問題は先駆的立場をとった点もあったので、障碍続出し困難に困難を重ねたが、遂に素志を貫徹したのは役員諸氏を中核とした父母各位の結束と熱意の賜であると深く敬意を表するものである。

戸塚地区を含めた旧鎌倉郡の東京依存の教育慣習を調べているうちに、この傾向は鎌倉郡だけではなく、神奈川県東部一般の傾向であることを知った。そしてこの慣習の淵源は旧幕時代の代官統治の行政制度にあると思われる。国際港横浜を有する神奈川県が、県立中学校設置に於いて全国中最後の県であるという原因にも関連があると思われるので、本校建設由来記の前編として、神奈川県中等教育史の概観を加えることとした。

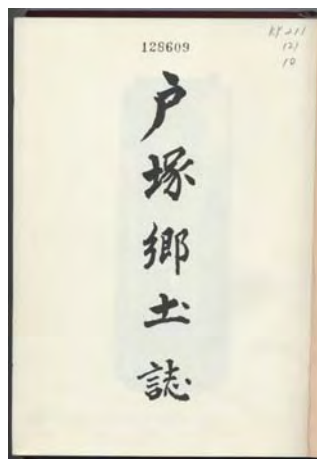
中嶋富之助／著

戸塚郷土誌(復刻版)

大和学芸図書株式会社

昭和53(1978)年12月10日

横浜市戸塚図書館



序

一昔十年といえます。十年前ということになりますと、記憶は確かなようでも、年月になりますと極めて曖昧なものになりがちです。そのために必要なものが日記であり、記録です。それにしてもそれらはあくまで個人の手控であり、諸団体における記録類であって、整理し公表することを目的に書かれたものではありませんから、私たちの目に触れることは殆んどありません。たとえあったとしても編年体の記録に終始しているでしょう。編年体であるかぎり無味乾燥なものになりがちです。それを克服するには一本すじが通り、それに肉付けがなされていなければなりません。一本のすじがすなわち史観です。こうした立場から書いたのが『戸塚区郷土誌』でした。

『戸塚区郷土誌』をものすにあたって重要な役割、史料を提供してくださったのが、昭和九年八月、中嶋富之助氏によって著作発行された『戸塚郷土誌』でした。「郷土の興廃変遷を研究し、御大典記念として郷土史を完成せしめ、将来も郷土の発達に資するの道を講じたい」ということで、戸塚町郷土研究会が結成されたのは昭和三年三月のことでした。会長には当時の町長内田隆三氏が就任、著述の実務は中山毎吉氏の指導を仰ぎながら、中嶋氏が担当しました。以来六年の歳月を閲して完成したのが『戸塚郷土誌』です。

本書は編を十章に分ち、先史時代で縄文・弥生文化を、原始時代で古墳文化をとり扱っていますが、これらは戦後考古学の急速な発達によって発掘作業がすすめられ、幾多の遺跡が発見されたことによって大幅な書き直しが必要となってきました。また奈良から室町時代にかけての古文書も当地には残存していませんが、東京大学史料編纂所等の長年にわたる努力によって関係寺社等から多く発見されていますので書き改めなければならない所も少ありません。ところが江戸時代の条下では沢辺本陣文書をはじめ当時披見することのできた多くの古文書を、年代順に原文のまま所収していますので、今もって利用度の高いものになっています。所収されていますものなかには、内山仁右衛門記録、鈴木小助日記、近藤幸太郎家文書のように散逸して見ることのできないものも沢山あります。現代は皇室と戸塚町の発展を知る上には好個の史料となるものです。戸塚町は当時鎌倉郡にぞくしていましたが、その後十四年四月近隣七か村とともに横浜市に編入し、現在は戸塚区の中心として発展を遂げています。一つの町でこれだけしっかりした、原史料をなまのまま紹介したものがつくられたのは、全国的に見てもそれほど多くはありません。もし本書が残されていなければ、江戸時代以降の町のようすは、これほど詳しく知ることはできなかつたでしょう。

四十数年前に刊行された『戸塚郷土誌』はすでにまぼろしの書になろうとしています。ないものねだりのようですが、本書を見たい、求めたいという声を耳にすることがあります。要望があることは生きた何ものかがあるからです。それは所収されている史料ということになりましょう。近時郷土史の探究が盛んとなり、県史・郡史・市町村史の新たな刊行や覆刻が行われておりますとき、大和学芸図書の強いご要望と、ご遺族のご理解とによって、横浜市編入三十年の記念すべき年に本書が復刊の運びになりましたことは喜ばしいことです。

昭和五十三年初秋／戸塚区郷土誌編集委員 大橋俊雄

郷土戸塚区歴史の会／編

ふるさと戸塚 体験でつづる明治・大正・昭和

戸塚区老人クラブ連合会

昭和54(1979)年11月1日

横浜市戸塚図書館



発刊にあたって

戸塚区老人クラブ連合会長 金子芳蔵

都市化の波は区内各所に押し寄せて、至る所の地形を変貌させてしまった。兔追いし山はいつか住宅地として開発され、小鮒つりし川はいつか暗渠となって姿を消してしまった。これに伴って人口も急増して近く四十万を数えるという発展振りを示している。人々の生活形態も急テンポで昔の姿から脱皮してしまった。この地に昔から伝わっていた各種の行事風習または語り伝えられていた民話・伝説・里謡等も忘れられようとしている。この地に住む者にとっては郷愁の情にかられ淋しさを覚えずにいられない。

こうしたものを次代に伝え残そうと昭和五十二年十一月、区の自主事業として「古老を囲んで戸塚を語る」事業と称し、各地区ごとに老人クラブの組織に乗って、古老を囲んでの会合を度々開き、資料の発掘と蒐集に奔走した。記録には若手の体指や青指の方々にも一部協力を求めた。しかしなんとといっても素人の寄り集まりなので、纏めは郷土戸塚区歴史の会の方々にお骨折りいただき、専門的な立場から集まった資料の取捨選択や不十分の資料の補足等大変なご苦勞をおかけした。

このように多数の方の努力がみのって、ここに「ふるさと戸塚」として発刊されることになったことはまことに喜びにたえない。失われようとしていた懐しいことどもが、次代の人々に読みつがれ愛郷の糧となることを信じる。

最後に関係された各位の協力に感謝を捧げ発刊のことばといたします。

大橋俊雄／著

戸塚区の歴史 上巻

戸塚区観光協会

昭和54(1979)年12月1日

横浜市戸塚図書館



知ってほしい郷土の歴史

戸塚区観光協会会長 石田全之

戸塚区が鎌倉郡から分立して横浜市に編入されてから今年で四十年を迎え、また区内の遺跡の発掘や保護にたずさわってきた戸塚区観光協会も創立二十五周年になりました。

ここらでもう一度、戸塚区の歴史を考え、集大成した郷土史をつくってみようということで、戸塚区の生んだ地方史の第一人者で、しかも日本の有数な宗教史学者である大橋俊雄先生に執筆をお願いし、横浜戸塚タイムス社原田修一社主をはじめ各位のご協力を得て、この度『戸塚区の歴史』を発刊することになりました。

本書は中高校生にも理解できるようにやさしい表現で書かれており、さらに専門的に研究される方には史料編を設け区内関係の古文書を収載し、また末尾には地名の索引をつけて土地の歴史を調べるのに便利なようになっています。

この度、上巻として「古代から中世まで」を発刊し、つづいて中巻に「江戸時代中期まで」をさらに下巻には「江戸末期から現代まで」を順次刊行してまいります。

これらの本を一人でも多くの人に読んでいただき、戸塚区の歴史を知っていただければ、私どもの幸甚といたすところです。

40万人の40年史 一戸塚一

横浜市戸塚区役所

昭和55(1980)年3月26日

横浜市戸塚図書館



## 発刊のことば

戸塚区が誕生してから、昭和54年4月で40周年を迎えました。誕生当時は人口3万6千人ほどの農村的な土地柄であった戸塚区が、今日のような大都市に成長いたしましたのも、ひとえに先人の方々の大変なご努力と区民の皆さまのご尽力のたまものと、深く感謝いたします。

40年といえば人生にたとえると壮年期です。ひとつの目標に向かって感うことなく進んでゆく世代といえましょう。戸塚区も、しだいに都市としての姿を整えつつあります。このときにあたり、わたしたちは再度戸塚区の歩んで来た道程を振り返り、共通の認識に立って明日の戸塚区を築いてゆく必要があらうと考えております。

ここに、区制施行40周年を記念し、この40年間の戸塚区の歩みを年表としてまとめました。内容については、不十分な点多々あることと思いますが、皆さまに戸塚区の歴史をかえりみていただくひとつの参考ともなれば幸いです。

最後になりましたが、戸塚区のさらなる発展と皆さまのご健勝を祈念して発刊のことばといたします。

昭和55年3月

戸塚区長 二宮徹

戸塚区環境図集

横浜市戸塚区役所

昭和59(1984)年3月31日

横浜市戸塚図書館



## 発刊にあたって

昭和14年4月人口約3万6千人(現瀬谷区分を含む)、大半が農地であった戸塚区は、現在では人口約43万人を擁する都市に発展いたしました。

そして今、昔から戸塚区に住んでいる人、この戸塚区を第2の故郷として愛着を持ちはじめた人、最近越してきた人などさまざまな人が戸塚区に住んでいます。これからも、人が移り住み、生まれ育っていくこの戸塚は、現在一起どのような状態にあり、将来どのように変貌をとげていくのでしょうか。

『よこはま21世紀プラン戸塚区区別計画』では、21世紀の戸塚区の将来像を「自然と文化の調和した、人間性豊かなまち」と定めました。このような戸塚区を実現するためには、行政、企業そして区民の皆さんの三者が一体となって、都市基幹施設をはじめとするハードな都市づくりと、人間性豊かなソフトな地域コミュニティづくりに不断の努力と英知を傾ける必要があります。

おりしも、昭和59年4月には、ダイナミックに変貌をとげる戸塚区が区制を施行してから45年目になります。行政区の再編成、地下鉄の延伸問題等戸塚区の重要な懸案事項に一定の方向づけがされる重大な区政の節目ともいべき年にあたって、この戸塚区環境図集を出版いたしました。区民の皆さん方が主体的にまちづくりや地域の魅力づくりに取り組むための参考資料としてご活用下さることを願ってやみません。

最後になりましたが、戸塚区の限りない発展と皆さまのご健勝を祈念して発刊のことばといたします。

昭和59年春

戸塚区長 菊池清

小雀小学校創立15周年記念資料  
編集委員会／編

わたしたちのまち

小雀小学校

昭和59(1984)年6月12日

横浜市戸塚図書館



## みなさんへ

小雀小学校が創立開校してから今年でちょうど15周年をむかえました。

本校の創立15周年を記ねんしまして、先生がたは児童のみなさんに、地域の発てんのれきしを書いたしりょう集を作ろうということになりました。

このしりょう集は、みなさんの住んでいる地域の発てんのれきしをできるだけわかりやすく書いたものです。みなさんに楽しく読んでもらうことはもちろんですが、学習のときにも役にたつようにと、先生がたが苦心をして、いろいろのお話を集めて作りあげたものです。

先生がたは、みなさんの住んでいる地域のむかしのことを調べるために、いろいろの家をたずねて歩きまわりました。

この地域のむかしのことをよく知っている人があると聞けば、その人の家をおたずねして、いろいろとめずらしいお話をうかがったり、むかしの地図や記ろくや写しんを持っている人がいると聞けば、その人の家をおたずねして、大切な地図や記ろくや写しんを見せていただきました。

このようにして、先生がたは集めてきためずらしい話や記ろくをひとつひとつまとめていって、一さつのしりょう集に作りあげていったのです。

このしりょう集には、先生がた全員のあせとど力がいっぱいこめられているのです。

わたしはみなさんが、このしりょう集を社会科の勉強をするときに、有こうに活用したり、おうちの人といっしょに楽しく読んでもらいたいと思っています。

また、このしりょう集ができあがるまでに、いろいろとお力ぞえをくださった、たくさんの方のかたたちに、あつくお礼を申し上げます。

横浜市立小雀小学校長 榎傳

24

大橋俊雄／著

戸塚の歴史

有限会社文華堂書店

昭和62(1987)年10月25日

横浜市戸塚図書館



郷土を愛する心を  
實方敏男

郷土を愛する方々のお力添えによって、戸塚区観光協会が小串清一氏を会長に設立されたのは、昭和二十八年五月のことでしたが、昨六十一年十月戸塚区は戸塚・栄・泉の三区に分区することになりましたので、それにともない会の名称を、旧戸塚区がともに歩んできた実情と、今後も手をとりあい歩んでいきたいということで、戸塚観光協会と改めました。

観光協会は設立以来、桜まつり・史蹟の保存と復旧・史跡めぐりをはじめ、各種の行事を企画推進してまいりましたが、その一環として区内に在住する人たちに、先人たちの歩んできた戸塚区の歴史を知ってほしいという念願のもとに郷土史の編集を企て、昭和四十三年十月『戸塚区郷土誌』を上梓、さらに五十四年十月には稿を改め『戸塚区の歴史』上下二巻を出版いたしました。

神奈川県鎌倉郡と呼ばれていた戸塚・瀬谷・中川・中和田・川上・大正・豊田・本郷の、北部一町七か村を合わせ、第六次横浜市市域拡張にともない、戸塚区が誕生したのは、昭和十四年四月のことでした。以来五十年になんなんとする歳月を閲し、東戸塚駅の新設・東海道線の戸塚駅停車、地下鉄の延伸等により住宅地化・内陸工業地域化が急速に進み、区内人口は昨年十月、四十五万人に達しました。

新旧住民の、戸塚にはどのような歴史があったのかという要望にこたえるため、宗教史や地方史に造詣の深い、生粋の戸塚在住の歴史家大橋俊雄先生によって編まれた『戸塚区の歴史』も絶版となり、郷土史を求める人はあっても要望にこたえることはできませんでした。こうしたとき、書肆文華堂岩崎要子氏より、開業二十周年にあたり『戸塚区の歴史』を再刊したいという要望がありました。しかし、すでに戸塚区は分区されたあとでしたので、大橋先生は再度、前著に多少の手を加え、『戸塚の歴史』として発刊することになりました。

本書が、戸塚を愛し発展を願う人たちの、「古きをたずねて新しきを知る」一助となり、郷土を愛する心を次代にお伝えいただく糧となれば幸いです。あわせて観光事業にも、ご理解とご協力をいただきたくお願いします。

昭和六十二年十月

## 戸塚の記念誌

25

駅 戸塚駅乗降者俳句会報400号  
記念合同句集

戸塚駅句会

昭和63(1988)年6月25日

横浜市戸塚図書館



あとがき

本書は、昭和六十三年二月戸塚駅乗降者俳句会報四百号の記念行事の一環として企画された「戸塚駅乗降者俳句会合同句集」である。

本書に収録したものは、戸塚駅乗降者俳句会会員百三十二名の作品のほか、秀句選者の先生方二十一名の作品、合計百五十三篇である。その句数は、全員三十句とし、作品の掲載は五十音順とした。作品の仮名遣いは新・旧仮名遣い自由とした。

作品の募集は昭和六十二年九月から昭和六十三年三月末日まで、本書の発行日は昭和六十三年六月二十五日、駅俳句会の日を選び吉日とした。

出版については、白橋印刷の北村恒正氏の格別のご厚意とご尽力を得た。記して深く感謝の意を表したい。

戸塚駅乗降者俳句会報編集発行人 海野金魚

26

戸塚の本ネ ―戸塚区ふるさと白書―

横浜市戸塚区役所区政推進課

平成元(1989)年4月1日

横浜市戸塚図書館



戸塚って何だろう。

「戸塚区ふるさと白書」を作成するに当たって、私たちは、まずこの問いに答えることから始めました。なぜなら、私たちのまち“戸塚”のイメージを明確にすることが、この白書の大きな目的だと考えたからです。

私たちは、戸塚のイメージを一言で伝えられる言葉(キャッチフレーズ)がないかとずいぶん悩みました。その結果、戸塚にはずいぶんたくさん“顔”があることに驚きました。「戸塚宿の面影を残す歴史のまち」「多くの工場・研究所が立地するハイテクのまち」「東京のベッドタウン」「横浜の副都心」「横浜都心への生鮮野菜の供給基地」「自然豊かなまち」「湘南への入口」などなどです。

しかし、これらどれ一つを取り上げても戸塚の全体像を伝えることはできません。また、どれか一つが抜け落ちて、やはり本当の戸塚を伝えられそうもありません。

そこで、私たちは、「戸塚とは、いろんな要素が“雑居”しているまちだ」と考え、戸塚の様々な側面を素直に紹介することにしました。

この“雑居”という考え方は、場合によっては没個性、匿名性につながる危険性があります。しかし、今、最先端のまちづくりの中で最も求められていることは、実はこの雑居性なのです。

戸塚は、長い歴史の中で、それぞれの時代のニーズに応じて少しずつ変化してきたまちです。そして、これからも、この長い積み重ねの結果である雑居性をエネルギーとしてこそ、発展していけるまちなのです。

“横浜”という言葉からは、恐らく“ミナト”というイメージが伝わるでしょう。“戸塚”は、それほどスマートなまちではないかもしれませんが、様々な可能性を秘めたまちと言えるのではないのでしょうか。だからこそ、私たちは、戸塚を愛し、戸塚に親しみを感じているのかも知れません。

「戸塚って何だろう」この問いに対する私たちの答えは「雑居」なのです。

戸塚区1990地区情報図集 地区別街づくり調査報告書

横浜市戸塚区役所区政推進課調整係

平成2(1990)年3月

横浜市戸塚図書館



平成2年3月  
戸塚区長  
岡部重之

戸塚区は、区制50周年にあたる昨年、「よこはま21世紀プラン・戸塚区計画」の見直し策定を行いました。この計画にそって、具体的に街づくりを進めるためには、何よりも区民のみなさんと行政が一体となって、区の街づくり、地域の街づくりのありかたを考えていく必要があります。

このたび、戸塚区民会議を中心に地域のみなさんの協力を得ながら、各地区に埋もれているより身近な情報・資源を発掘し、それらの地区情報を「地区別街づくり調査報告書」として取りまとめ、各地区の街づくりの課題を明らかにしました。

この「地区別街づくり調査報告書」が、区民のみなさんと、区役所はじめ行政側の共通の参考資料となり、今後の戸塚区の街づくりに積極的に活用されることを願ってやみません。

平成2年3月  
戸塚区民会議代表委員  
鈴木嘉一

私たちのふるさと戸塚をよりよい街にするために、まず、私たちの足元を見直すことから始めてみました。区民会議運営委員を中心に、自分たちの住んでいる地区を実際に歩いてみて集めた情報と、行政の資料とを、一冊にまとめたものが、この報告書です。

今後も、私たち区民と行政とが、互いに協力して、副都心にふさわしい戸塚区をつくっていくため、この報告書を参考としていただければ幸いです。

横浜市都市計画局戸塚駅周辺再開発事務所／編

とつかみらい 戸塚駅東口第一種市街地再開発事業誌

横浜市都市計画局戸塚駅周辺再開発事務所

平成2(1990)年4月

横浜市戸塚図書館



ご挨拶

戸塚駅東口地区再開発協議会

会長 坂本光雄

昭和37年頃より懸案となっていた戸塚駅周辺の街づくりは、東口地区1.8haについて、住民権利者の大きな決断により出発いたしました。多くの困難を乗り越えて、ついに再開発事業が完了しましたことは誠に感慨無量であります。

ここにその経過を顧みますと、戸塚駅周辺の再開発はマスタープランが検討されている時に、オイルショックその他の情勢により一手中止になっておりました。しかし、昭和51年に横浜市営地下鉄の戸塚への延伸計画が発表され、これを機会に東口地区においては、再開発機運が急速に高まり、市の再開発計画草案が地元へ提示されました。これに対し、住民が主体的に横浜市と対応・協議しながら地元の意見を集約していくために、昭和53年8月に地元住民権利者の総意により、戸塚駅東口地区再開発協議会を設立し、協議会活動を開始しました。

その後、都市計画決定、事業計画決定、権利返還計画等の困難な局面に遭遇しつつ諸問題を解決してきました。そして、昭和60年1月から待望の再開発ビルの工事に着工しました。その間、営業者は仮設店舗で営業を続けてきましたが、昭和61年11月再開発ビル『ラピス戸塚1、2、3』3棟が完成オープンし、選定が難航していましたキーテナントも第1ビルに(株)丸井、第2ビルには(株)有隣堂が入居することになりました。

ビル完成後は、駅前公共施設としてペDESTリアンデッキやシンボルモニュメント、バスターミナルなどが整備され、地下鉄とJR戸塚駅が地下コンコースで結ばれるなど市民にとって利便性のある安全で快適な近代的商業街に新しく生まれ変わりました。

このように再開発と調和のとれた商業活動により、ラピス商店会は産経商業フォーラムにおいて建設大臣賞の栄誉ある受賞もいたし、これも関係各位のご教授の賜物であり、また市関係者のご指導ご協力によることと深く感謝いたします。

また、東口地区の街づくりを進めるうえでは、地元権利者のご理解とご協力という大きな貢献があったことを忘れることはできません。

最後に、シンボルモニュメント『とつかみらい』のように戸塚が横浜市の副都心として未来に向かってますます発展していくことを願い、事業完了と事業誌発刊のお祝いのごことばといたします。

平成2年4月

戸塚区史刊行委員会／編

戸塚区史

戸塚区史刊行委員会

平成3(1991)年3月31日

横浜市戸塚図書館



『戸塚区史』の発刊によせて

戸塚区長 岡部重之

このたび、区制施行五十周年を記念して『戸塚区史』が刊行されましたことを、区民の皆様とともに心からお喜び申し上げます。刊行にご尽力いただいた刊行委員の方々、編集にあられた編集委員の方々、その他関係各位に心から敬意を表し、感謝申し上げます。

東海道戸塚宿として歴史を積み重ねて来た戸塚も、昭和十四年に戸塚区として誕生、平成元年に五十周年を迎えました。この間二度にわたる分区を経験するとともに、急激な都市化による変貌を余儀なくされてきました。

一昨年改訂された「よこはま21世紀プラン」戸塚区計画では、戸塚は横浜市の副都心として位置付けられ、戸塚駅周辺地区開発をはじめ、道路交通の改良、市民利用施設の整備など、住みよい街づくりを推進していくこととしております。

このような中で、歴史的資料やいい伝えを、貴重な文化遺産として保存、記録し、後世に受け継いでいくことは、現在に生きるわれわれの責務といえるのではないのでしょうか。こうした意味からも、このたび『戸塚区史』が刊行されたことは大変意義深いものがあり、時宜を得たものといえましょう。

本書を通じ、多くの方が明日の住みよい戸塚の街づくりに向かって「ふるさと戸塚」に思いを寄せ、地域の連帯の輪を一層広げて頂ければ、と願ってやみません。

私たちのふるさと 踊場50年のあゆみ

踊場町内会50年史編集委員会

平成4(1992)年8月31日

神奈川県立図書館



はじめに

私たちが今住んでいる踊場の町内会は、昭和15年に初めて結成されました。当初は時の流れに応じて発足しましたが、住民同士の交流・助け合いが深まり、自治活動として発展しつづけてきた結果、めでたく50周年を迎えることになったわけです。

去る昭和59年の総会において、会長より「50年史発刊」の提案があり、これを受けて同年5月編集委員会が組織され、活動を開始しました。実際に作業に入ると、初期の町内会で活躍された方々はすべて亡くなられており、今ここでその歴史を記録しておかなければ、自分たちが住む土地の歩んできた道のりを跡付けることは永久に不可能になるだろうという思いが痛切に湧いてきました。

戸塚町についての歴史は、「戸塚観光協会」や「郷土・戸塚区歴史の会」などの手によってまとめられています。踊り場周辺のものには昭和60年に「踊場地区連合町内会30周年」の形で編纂されています。

これらの中に取り上げられた踊場からさらに一步奥に踏み入れた踊場史を書きとどめ、踊場に生き、踊場を愛し、踊場に尽くした多くの先輩たちの愛と努力を現出したいと考えます。そして、踊場に生まれ育つ人々の第一の故郷として、踊場に移り住まれた人々の第二の故郷として、より深く踊場を愛していただくための一助ともなれば幸いです。

編纂にあたり、多くの先輩の皆さまに昔の話をお聞かせいただきました。ここに厚く感謝の意を表する次第です

踊場町内会50年史編纂委員会  
委員長 武田武

日立戸塚総合病院五十周年誌編集委員会／編

五十年のあゆみ

株式会社日立製作所戸塚総合病院

平成4(1992)年8月31日

個人蔵



ごあいさつ／50年史発刊に際して／日立戸塚総合病院院長／柴田俊郎

太平洋戦争勃発後間もなく、昭和17年5月戸塚工場内に診療所を開設し、同年9月に日立病院から横山功喜先生を迎えて丸池診療室を建設移転したのが、そもそも当院の始まりであります。あれから激動の昭和、そして平成と年を経てまさに半世紀の病院の歴史が流れ、本年、創立50年を迎えました。

当院の歴史には、10年毎の節目があります。

すなわち、昭和17年の診療所オープン。やがて、現在の丘の上に3科34床の木造建屋病院の建設が27年。そして6科、やがて126床となる鉄筋構造の現在の病院完成が37年。結核の終焉と共に結核病棟の16床をやむを得ず閉鎖したのが47年。耳鼻咽喉科を設置し、総合病院づくりの条件が揃ったのが57年と、10年毎に脱皮成長を遂げてまいりました。この間40年、歴代の院長をはじめ、病院全職員の方々の日夜懸命のご努力がありました。

一方、昭和55年10月には病院に隣接して日立戸塚総合健診センタ(日立戸塚健保所有)が誕生し、戸塚地区に次々にできた工場内診療所と合わせて、病院、診療所、健診センタの三位一体の職域地域病院が完成しました。

そして、さらに10年目の本年、平成4年は50周年を迎え、時あたかも日立製作所創業80周年記念事業として、ご認可いただいた当院の全面増改築の完成の年と重なりました。

日立マンとして、戸塚病院の病院人として、願ってもない天恵の年になったわけであります。新病院は、日立の特長を十分に組み入れた近代医療機器の設置と、医療情報システムをとり入れた、患者さんに優しい、インテリジェントホスピタルに生まれ変わります。

想えば、初代横山院長を中心に結核全盛のころ、古き木造の建物と諸先輩のアットホームな心温まる診療風景。ついで病院鉄筋近代化にともなう各科の充実発展と、それに続く苦労物語。さらに最近の最新鋭の医療機器を導入しながらの質の良い医療の提供と、目まぐるしく変わったこの50年でした。

このように、当院が今日まで発展し得たのも、本社各歴代社長室長方や幹部の方々のご懇篤なるご指導、ご支援の賜物であり、また、つねに親身になって支えてくださった戸塚工場歴代工場長および幹部の皆様のご深いご理解と、心温まるご支援のお陰であります。この機会に併せて厚く御礼申し上げます。さらに戸塚地区日立製作所ならびに関連会社各位の変わらぬご好意に深く感謝いたします。

以上、これを機会に50年の歴史を振り返り、記念誌として刊行し、できる限り記録を正確に記し、新たな時代への布石とするのは、私どもの責務と考えます。私ども現在に生きる職員は、次の50年に向かって、この記念誌を反省の糧として、よりきめ細かい医療を提供すべく努力してまいります。

どうぞ、関係各方面の方々の心温かいご支援をお願い申し上げます。

最後に記念誌を発刊するにあたり、この50年、一途に歩んでこられた歴代院長と旧職員先輩の方々や、現在現役でご活躍中の職員の皆様方に対して、改めて心からの敬意と謝意を表すものであります。

戸塚斎場のあゆみ

横浜市衛生局総務部戸塚斎場

平成9(1997)年3月

横浜市戸塚図書館



発刊のあいさつ

戸塚斎場に関係して20余年を経過しようとしております。

私自身、「戸塚鳥が谷区画整理組合」に関係しておりまして、このような施設は近くには無いに超したことはないと真剣に考えた時期もありました。しかしながら、火葬場という施設を十分に認識し、理解できていないなかでは、自分自身の考え方を押し付けることはできませんでした。戸塚斎場を地域内に受け入れてもらうためには、関係者をどのように説得すれば良いのか判断に苦しみました。

「組合設立準備会」を設立しまして、組合設立のための事前交渉を数年間に亘って行いました。そのなかでは、私共も横浜市も火葬場については言及をいたしませんでしたが、最終段階に来まして、「戸塚火葬場」を区画整理組合の中に包含する様にと言われました。

若し除外するならば区画整理組合の設立認可は出来ないということでした。しかし、その時までには組合設立準備会は数億円を出費しておりまして、この額を組合員全員で負担することは不可能であるということは明白でした。当時土地価格が低かったこともありまして、組合準備会としても横浜市の申し出を呑まざるを得なかったのが実態でありました。一方、横浜市も区画整理組合の設立を妨げることもできず、種々と助言をしていただきました。

横浜市との協調のもとに工事が順調に進行していた時に、第1次オイルショック(1973年10月)が発生し、工用大型機械が全部運転できなくなり大混乱になりました。このため工事費が3倍近く増加してしまいました。組合内部も混乱して、対策に苦慮した記憶が生々しく残っております。また、周辺居住の方々との対話をし、火葬場への理解を求めることが区画整理組合との交渉以上に大変でした。近隣の方々には、火葬場近くに転居されてきて、煤煙・悪臭に悩まされはじめたこともあって、一挙に6倍の施設になるとの単純計算で抵抗されました。地域の方々といっても、明治、大正年間から住まわれている方々は、悪臭から早く解放されたいという強い要望があり、反対の理由にも、微妙な差が感じられました。

このような時に、ペットの焼却場の併設を横浜市から提案された時の我々の困惑は、計り知れませんでした。しかし、関係者のご理解を得られたことは幸甚の極みでした。また、覚書の要望事項による追加工事として、葬祭ホールを建設することが決定しておりました。計画実施準備の為に、他都市の葬祭ホールを視察してみますと、利用効率については、各市共に低率で苦労していることが判りましたが建設を提案しました。当分の間、毎月利用状況を確認に行ったことも大変なことでしたが、今となっては楽しい思い出です。昨今の利用率が95%以上のこと。順番待ち1週間ということも聞いており、「先見の明」とまでは言えませんが、葬祭ホールを整備してよかったと思っております。

“形あるもの滅す”の言葉通り「いつの日か」にこの施設の改装、改築が行われることも明かであります。どうかその時には、増改築が喜んで行われることを祈ります。

また、本誌の発刊に際し、貴重な資料を多数提供くださった方々に厚くお礼申し上げます。

平成9年3月／戸塚斎場連絡協議会会長 廣田久雄

33

とつか歴史ろまん制作実行委員会

とつか歴史ろまん 一探訪あんない  
10コース

横浜市戸塚区役所地域振興課

平成10(1998)年12月1日

横浜市戸塚図書館



はじめに

戸塚区は、昭和14年の誕生以来発展を続けて、平成11年4月にはめでたく60周年を迎えます。その間2度にわたる分区を経て、現在は人口約25万人を擁する行政区となりました。戸塚区は、これからも発展し変貌していくことですが、東海道や戸塚宿をはじめとした名所旧跡が数多くある歴史の香りあふれる街でもあります。

区役所には各方面から戸塚の歴史に関する問い合わせが数多く寄せられていました。それらに答えるために、区制60周年記念事業の一環として、戸塚の歴史を簡単に学べる本の制作を企画しました。作成は平成9年5月から始まり、戸塚歴史の会を中心とした制作実行委員会のお力を借りまして、このたび発刊することができました。

持ち歩くのに便利な大きさと、わかりやすい地図や写真を多く載せて親しみやすい本に仕上げたつもりです。見所いっぱいの10の探訪コースを用意しました。どのコースからでも好きなコースを、どうぞ歩いてみてください。まだ私たちが見落としているかもしれないすばらしい「とつか」を発見し、さらにあなただけの「とつか歴史ろまん」を完成してみてください。

さあ、この本を持って“ろまん”あふれる旅に出かけましょう。

戸塚区役所

34

記念誌編集委員会／編

わがまち戸塚一丁目

〔戸塚町一丁目町内会〕記念誌編  
集委員会

平成13(2001)年8月10日

横浜市戸塚図書館



発刊にあたって

編集委員長

戸塚町一丁目町内会

前会長 金子守男

黒塗りの、ロールスロイスが、一丁目の町内を通過して行きました。

後部座席には、葉巻をくわえた老人が、身を沈めておりました。

時の総理大臣、吉田茂さんです。

戦後まもないころ町内で見かけた光景です。

時は流れ半世紀が過ぎました。

その間、町内に存在した、二つの山の一つが、姿を消しました。

一つは、清源院さんの山で、今も変わりなく、町内を見おろしています。

そして、もう一つの山は個人の所有する山でした。

所有者の枡田さんは日頃「戸塚の街はこの山を無くさなくては発展しない」といっており、その言葉通りに、山を切り崩し、跡地にビルを建設しました。現在「西友ストア」が営業しています。

町内が賑やかになったのはいうまでもありません。昭和30年中頃のことです。

平成になり、町内に変化がありました。長後街道の拡張にともない、数件の店舗が移転を余儀なくされました。

そして、大きな変動の時を迎えようとしています。戸塚駅西口の再開発が、具体化されることになったからです。

一丁目町内会は、再開発される地域と、されない地域とに二分されることになります。

街が、開発され、理想的な街に生まれ変わることは決して悪いことではありませんが、影響を受ける町内会にとっては、誠に寂しいことであり、残念なことであります。

この冊子が完成することにより、一丁目町内会の現在の姿が、孫子の代まで伝わることを祈念しております。

発刊にあたり、ご苦勞されました、役員の皆様に感謝申し上げます。

会員皆様のご健勝、ご繁栄をお祈り申し上げます。

35

写真集 とつか70年目の風景 193  
9～2009

横浜市戸塚区役所区政推進課

平成21(2009)年3月

横浜市戸塚図書館



記念誌発行に寄せて

昭和十四年(1939年)鎌倉郡の一部が横浜市に編入され、戸塚区が誕生しました。その後、瀬谷区、泉区、栄区を分区しましたが、旧東海道を軸とする中央部分が戸塚区として残り、今年区制七十周年を迎えました。

この七十年という月日は、決して平坦なものではなく、今日を迎えることができたのも多くの区民の皆さまのたゆみない努力の賜であると感謝申し上げる次第です。

ここに七十周年を記念して「写真集 とつか70年目の風景」を作成したのも、そのような歴史を知り、さらには今の戸塚のさまざまな顔を知って、地域に親しみや関心を持つきっかけになれば、と考えてのことです。

第一部の「とつかのいま～四季を感じる街・人・自然～」は現在の戸塚の表情を、第二部の「とつかのむかし～温故知新～」は昔の写真と現在の写真を並べエピソードも紹介しながら時の流れを感じられるよう編集しました。いずれも区民の皆さんから寄せられた写真が中心となっています。

この記念誌を開くたびに、戸塚区の魅力に触れ、戸塚区への思いを強くしていただければ、これに過ぎる喜びはありません。

横浜市戸塚区長 谷内徹